

横芝の碑 (その四十一)

— 乗馬姿の馬頭観音様 —

本紙の、このシリーズ第三十七号で、延命寺の六地藏、というのを御紹介申上げたことがありました。そのすぐ後で、その記事を読まれたと、いう方から、「お地藏様のすぐ傍に、余り見掛けなお姿の石仏が建っている。」という御連絡をいただきました。最近延命寺の近くに所用があつて出かけたので、ふと、思い出したまま立寄つて見ましたところ、成程六地藏と並んだような形で、一基の石仏が建っていました。確か珍らしいお姿で、高さは凡そ六十程でなにか馬か犬の様な形をした動物の上に、よくお見掛けする庚申様によく似た仏様が勝つておられると、いうものです。住職の戸村静覚師のお話によりますと、これは馬頭観音様で、普通の馬頭観音様は、頭上に馬の頭を戴き、忿怒の相と言つて、邪悪に対する、お怒りの相を現し、正面と左右の三面のお顔を持たれ、二臂、八臂を有しておられる、というお姿が殆んどですが、珍に、この様な変わったお姿もある、ということ。下の動物は馬で、勝つていらつしゃるのは、馬頭明王と申し上げ、八

大明王の御一体で、非常に馬を可愛がり、また保護される明王様といわれています。

この馬頭観音様は、元、北清水の信号のある交差点近くの、或農家の屋敷内に祀られていたのですが、農家経営も変り、屋敷内の利用方法の都合や、また、このまま個人の屋敷内にお祀りしておくことは勿体ない、等ということ、延命寺の和尚さんにお願ひして、この境内に御遷座申上げたものだそうです。

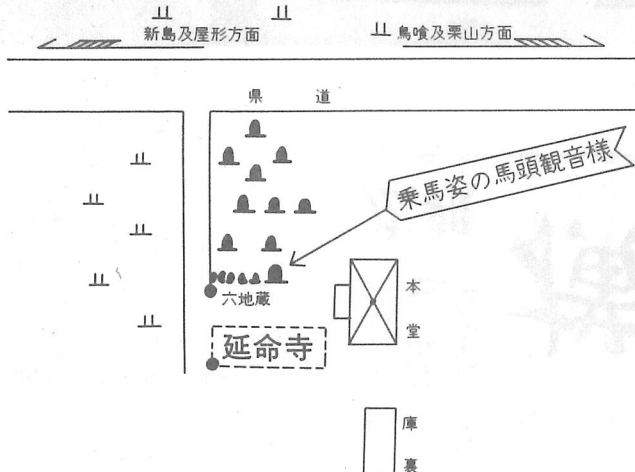
見なれない素朴さを持った姿の石仏の前に立ちながら、この姿の着想は、石工の老えによるものであろうか、或いは、建立者の発想によるものであろうか、等と思ひめぐらしている中に、この場所が何か人里離れた峠辺りの路傍にでも居る様な錯覚に落入り、すぐ後約十メートルの所が、絶間なく自動車等の往来が続いている県道であること等も、何時か忘れていた自分に気が付く位なのです。

○写真は、その石仏で、刻まれた仏像の右側には、西明、左側には願主源右エ門、とだけ刻まれていて、年号等もなく、従つて、建立

された時代等も詳かではありませんが、馬頭観音の信仰が盛んであつたのが、江戸時代であつた、ということや、願主が名前だけで、苗字の刻まれていないこと等から推察しますと、すくなくとも、徳川時代の建立と考えてよいと思ひます。

注(八大明王||降三世・大威徳・無能勝・不動・馬頭の五大明王に、穢迹・軍荼利夜叉・金剛夜叉の三大明王、若しくは、大咲・大輪・歩擲の三大明を加えたものを総称する||広辞苑による。)

(養護老人ホーム小沢所長寄稿)



たばこは火災原因の一番
幸せを明日につなぐ火の始末!!